

近現代における北野天満宮瑞饋祭の変化について

——西之京の変化を焦点に——

吉 野 亨

はじめに——本研究の目的と意義——

本研究では、北野天満宮で行われている瑞饋祭、その祭りで瑞饋神輿（神輿の形をした供え物）を作成している西之京瑞饋神輿保存会の人々のエスノグラフィーを描き出すことによって、戦前から現在に至るまでの瑞饋祭の変化と保存会の人々を取り巻く生活環境の変化に因果関係があるか否かを解明することを目的とする。

これまで瑞饋祭および瑞饋神輿については、岩井宏實や櫻井敏雄、瀬川弥太郎によって瑞饋祭の概要と歴史が纏められ、民俗学の分野で事例として紹介されるに過ぎなかった^{〔1〕}。筆者は、祭祀研究の立場から特殊神饌としての重要性を鑑み、著書『特殊神饌についての研究』において特殊神饌の一事例として取り上げ、瑞饋神輿が成立した背景には地域独自の天神信仰と西之京の生業が存在していることを

指摘した^{〔2〕}。

筆者が、平成二十年（二〇〇八）より現在まで継続している瑞饋祭の研究調査の過程において、明治以降に発足した保存会（旧称は西之京青年団・西之京青年会）が西之京の人口が増加傾向にあるにも関わらず常に若者不足に悩まされていたこと、昭和に入ってから宅地開発に伴う西之京周辺の農家の減少に伴って、瑞饋神輿に必要な農産物の確保に如何に対応するかなど、常に問題を抱えそれらをクリアしてきたことが判明した。また、現在の保存会を構成する人員の高齢化が進んでいること、祭礼研究において瑞饋祭が研究対象として看過されてきた事情も相まって、戦前における祭礼の様相や西之京一带の「地域の記憶」が喪失してしまう可能性が生じている。この点は保存会内でも懸念されており、過去にどのような経験や経緯を経て現在に至る祭礼の形を作り上げてきたのかを知ること、今後の保

存会の活動と祭礼の継続に役立てるためにも、戦前から戦後、そして現在までの祭礼の変化について喫緊に聞き取り調査とそれに基づく記録化を行う必要性が生じている。

そもそも西之京瑞饋神輿保存会は、旧西之京十六町の人々で構成されている。ここでいう「西之京」とは京都市上京区西ノ京・中京区西ノ京の町々の中でも、西之京十三町という限定的な空間に対しての呼称として通用している⁽³⁾。

現在の西之京、その景観を概観すると、西大路通りの東側にある北町や川瀬町と言った付近は妙心寺道や天神通と言った古くからの通りに近世や近代の建物や家屋などが残り、さらに細い路地に家屋が軒を連ね、京都の古い街並みが残っている。その一方、近隣にある大学生向けのマンションやアパートメントや、新築の戸建て住宅などが古さの残る街並みの中に目立ち始めている。西大路通りの西側に目を移すと、御土居の旧跡が残る北野中学校があり、中学校に面した妙心寺道は飲食店や鮮魚店、料理屋などの商店が軒を連ねており西大路通りを挟んだ東側とは違った景観となっている。

西大路通りを南に行くと丁R円町駅がある他、市営バスなどの交通網の便が整っている。そのため、朝は通勤・通学する人々が多く行き交っている。西大路通り沿いにはビルが立ち並んでおり、西之京の周辺は近代のかつ都市的な

景観に変わりつつある。

遡って明治初期の迅速図などを見ると、北町や川瀬町の周辺は家々が立ち並ぶ中に田畑が点在するような景観で、現在の天神御旅商店街のある妙心寺道の周辺には田畑が多く存在していたことが窺える。また、川瀬町や西上之町のあたりにはかつて多くの西陣織の職人がおり、最近まで機織りの音を耳にしたという。家々が多く立ち並び西陣織の職人なども多かった北町や川瀬町周辺と、西大路通りを挟んでかつては農村的な景観を有していた西ノ京村、かつては都市的な景観と農村的な歴史的景観を内包していた空間を、祀り手達は「西之京」として認識している。

このような特徴的な地域の中で行われる瑞饋祭が、近現代においてどのような変化があり、その変化の要因が何に求められるのか。本論文では、西之京瑞饋神輿保存会の会員を中心にアンケート調査を実施し、戦前から現在いたるまでの瑞饋祭の変遷と西之京の変化について着目し、分析を試みる。

二、瑞饋祭の今と昔

——祭りと祀り手の歴史の変遷——

(一) 瑞饋祭の今

瑞饋祭は十月一日から五日の期間行われている、北野天満宮の祭りである。祭りは一日に北野天満宮からの出御祭で幕を開ける。天満宮の御鳳輦は西ノ京御輿岡町にある御旅所へ神幸し、還御祭が行われる四日までは御旅所が祭りの中心となる。御旅所では二日に献茶祭、三日に西ノ京七保会による甲御供奉饌かぶとのごくが行われる。また、御旅所には一日から瑞饋神輿が奉安されている。四日に還御祭が行われ、天満宮の御鳳輦は本社へとお帰りになる。この時、瑞饋神輿は天満宮の渡御列よりも先に御旅所を出て、西之京から天満宮にかけて神輿の渡御列とは別の道順で巡幸し、夕方に御旅所に帰る。五日には、ご本社にて后宴祭が行われる。一方で、御旅所では瑞饋神輿の解体が行われる。以上が、瑞饋祭の大まかな内容である。次に瑞饋神輿の概要を述べる。

瑞饋神輿は、神輿型と呼ばれる神輿の形をした木製の台に、芋茎をはじめとする蔬菜、果物、海藻類、麦わら細工などを飾り付けた神輿状の神饌である。(写真1—4) 九月

初旬より瑞饋神輿の各部位の作成が開始され、部位毎に担当の会員が協力して作業を行っていく。九月三十日に、完成した各部位を神輿型に取り付けて完成となり、祭礼初日から御旅所にてお披露目される。

(二) 瑞饋祭のはじまり

次に、考察対象とする瑞饋祭の歴史の変遷について、『北野誌』『日本歳事史』^⑤（以下、『歳事史』と略す）『瑞饋神輿略記』^⑥（以下『略記』と略す）の記述を参考に一部、『北野天満宮史料』^⑦などの史料により補足を加えながら概説する。なお、『北野誌』『歳事史』『略記』の記載にも異同がある場合があり、特に断りが無い場合は三点の史料に共通する記述とする。

『北野誌』によれば、現在の瑞饋祭の原型となる祭りが始まったとされるのは、祀り手である西京神人が菅原道真公左遷に随行する形で太宰府まで赴き、道真公御自作の木造を京都へ持ち帰り、西之京北町に小祠を立て安楽寺と称し独自に道真公を祀り始めた時期と伝承されている。なお、西京神人らは神役奉仕の傍ら農業を営み、九月九日に、収穫した新穀蔬菜や草花を飾り付けてお供えたのが、瑞饋祭の原型とされている。

北野天満宮が鎮座し、永延元年（九八七）八月五日に北

表1 瑞饋祭日程（瑞饋祭現行次第）

月日	時間	祭礼日程	瑞饋神輿の動き
祭礼約1か月前			西ノ京瑞饋神輿保存会集会所にて道具調べ（神輿型の点検）及び瑞饋御輿を飾る、各部品に用いる蔬菜や花の収穫、部品の作成が開始。
9月30日	午後1時～ 午後5時		瑞饋神輿の飾り付け。（隅環珞・平環珞・真紅等の取り付け）
10月1日	午前9時	北野天満宮本社にて出御祭斎行。	瑞饋神輿は御輿庫にて奉安。
	午後1時	天満宮本社より行列鳳輦などの行列出発。	瑞饋神輿は御輿庫にて奉安。
	午後4時	御旅所にて行列到着。着御祭斎行（田舞・鈴舞奉納）。	瑞饋神輿は御輿庫にて奉安。
10月2日	午後10時	御旅所にて、献茶祭（表千家宗匠奉仕）。	瑞饋神輿は御輿庫にて奉安。
10月3日	午後3時	御旅所にて、西ノ京七保会による甲御供奉饗。	瑞饋神輿は御輿庫にて奉安。
10月4日	午前10時	御旅所にて、出御祭斎行。	保存会及び外部の担ぎ手により、瑞饋神輿を曳き車に乗せ、瑞饋神輿出御の準備。
	午後1時	天満宮本社鳳輦の列、出御。	瑞饋神輿出御。天満宮本社の鳳輦とは別の道筋で巡幸。
	午後5時	天満宮本社に鳳輦の列、着御。着御祭。	瑞饋神輿、御旅所へ着御。
10月5日	午後3時	天満宮本社にて、后宴祭（八乙女による田舞奉納）。	朝より瑞饋神輿解体。

※ 2009年から2015年にかけて行った瑞饋祭の調査を元に作成した。

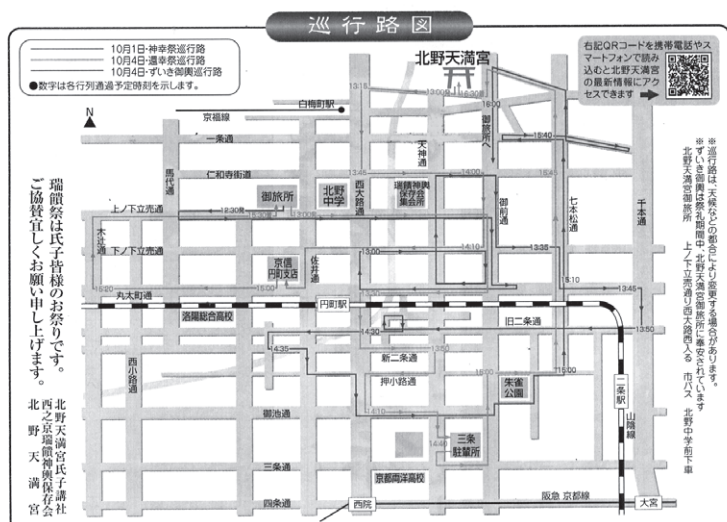


図1 瑞饋神輿の巡幸路（点線が瑞饋神輿の巡幸路）

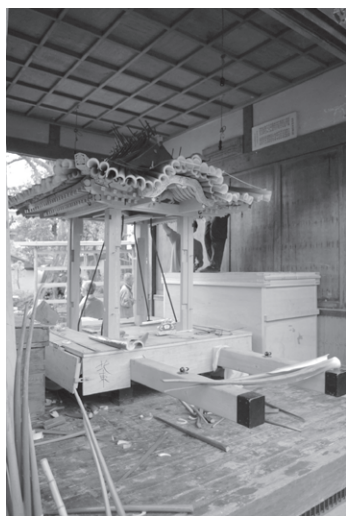


写真 2 瑞饋神輿の四方千木型



写真 1 瑞饋神輿(平成 20 年 10 月 4 日筆者撮影 以下の写真は筆者の撮影による)

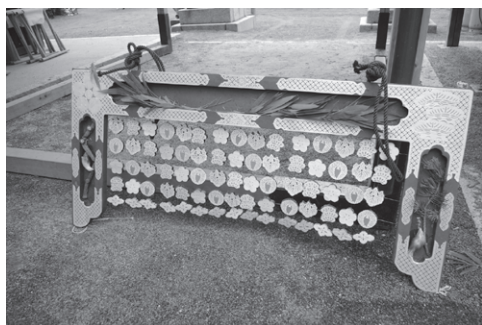


写真 4 平瓔珞



写真 3 すみようらく 隅瓔珞

野祭が行われるようになり、天満宮の神輿が西ノ京御輿岡の地を御旅所として渡御するようになった。この時、西京神人らは御旅所に駐輦していた祭りで供えていた農産物と草花などを添えて神饌として供えるようになったとされている。

なお、この時期の瑞饋祭の内容については、あくまで『北野誌』『歳事史』『略記』に記載されている伝承に基づく記述であり、他の文献史料からの裏付けが取れない部分が多い。一つ補足出来る箇所を他の史料から挙げるならば、『北野天満宮史料』から中世におこなわれていた北野祭において西京神人が神饌を献納していたことが確認できる。



写真 5 真紅

『北野天満宮史料』「三年一請会引付」応永四年（二三九七）七月廿日条に「以両公人西京大宿禰如先々来朔日飭神供早々可調進之由大宿禰合触了」とあり、北野祭において八月朔日に供える「飭神供」を西京が「調進」していたことが窺える。また『杜家日記』嘉吉三年（二四四三）十一月十六日条には「一、自明後日十八日西京神人等長日可備麴神供云々」とあり、十一月に延引した北野祭の執行の際に「麴神供」を西京神人が調進していたことが記されている。これらの記述が、『北野誌』『略記』に言う西京神人らの祭りから派生した形で供えられていた神饌であるかは現時点で確認出来ないが、西京神人らが北野祭での諸役の一つとして神饌の調進を行っていたことが確認できる。

（三） 瑞饋神輿の成立

西京神人らによって神饌の献納が行われていた北野祭は、応仁元年（一四六七）に発生した応仁の乱の影響もあって途絶した。北野祭の途絶を境にして、これまでに献納していた神饌は、仕様を変更して献納を継続していたとされる。従来は神人の家ごとに一台ずつ神饌を献納する形式だったが、二、三の家で組を作り、組毎に一台の神饌を作ることになった。なお『北野誌』には神饌を献じた場所として「本社」と記載がある一方、『歳事史』『略記』では「瑞饋祭」を「九月四日に奉仕」する際に神饌を献じたとしている。

この神饌が大永七年（一五二七）に今の瑞饋神輿の祖形とも言うべき形態に変化を遂げたと『北野誌』『略記』には記載されている。各組で作成していた神饌から、神人全体で一つの神饌を組み上げる形へと変更され、その盛り付け方も変化した。「御供槽」と呼ばれる大型の器に、新穀蔬菜と草花を盛り込み、さらに農産物を使って人物や花鳥を模した飾り付けをしたとしている。また、この「御供槽」は二本の棒を以って担がれ献上されたとされている。現在の瑞饋神輿に見られる細工物や、神輿のように二本の棒で担ぐなど、神輿と類似する点が多く見られる。

「御供槽」を棒で担う形からさらに変化し、慶長十二年（一六〇七）に至ると、西京神人と西之京の農家らが連合し葱花輦型の神輿型を作成し、そこに新穀蔬菜や草花を飾り付ける形式になり、瑞饋神輿と称したとされる。これが現在祭礼に登場する瑞饋神輿の原型と考えられる。作成された瑞饋神輿は、西之京北町の安楽寺に運び込まれ清祓を請けた後に、北野天満宮へと運び込まれ広前に据えた後に、西之京の町々を担いで巡ったと記載されている。

他の史料に瑞饋祭及び瑞饋御輿について描写や記述を求めると、まず慶長の頃に成立したとされる伝土佐光吉『十二ヶ月風俗図』¹⁰九月の図に、草花などを飾り付けた神輿が町中を練り歩いている様子が描かれている。次に、『北野天満宮史料』の『宮仕記録』宝永三年（一七〇六）九月三日条に「西京上大将軍下大将軍作物之銚五本釣灯笠銚警護等相添、始テ昼七ツ時分ニ当社へ参ル、四日同前、昼から夜ニ入マテ段々来ル事珍敷旨也、尤社中へ入も有、」¹¹頃日風聞ニ西京ニ祭礼ヲ催ス旨也、少キ御輿ヲ拵等之事也、¹²「風聞ニ御旅所へ神供ヲ備、又ハ御輿之沙汰ニ付宮遷被致等之事也」¹³とあり、また九月四日条には「及晩西京から大太鼓二ツ打来ル、大鼓打小兒黒羽織ノ大人兩人見物ニ交リ相添也、灯籠五ツ来ル、」と西之京や大将軍そして北野天満宮にかけて銚の練り歩きや御輿を担ぎ回る祭りが行われ

ていたと記述されている。祭りの時期が九月三日から四日にかけて行われていることから、当時の瑞饋祭の様子を描写した記述と考えて差し支えないと思われる。これ以降も『宮仕記録』には九月四日に西之京で練り物の祭りが行われるという記述が見られ、継続的に祭りが行われていたと考えられる。¹⁴

その他『北野天満宮史料』以外にも、享和二年（一八〇二）『俳諧新季寄』¹⁵天保三年（一八三二）『大日本年中行事大全』、安政六年（一八五九）原田光風『及瓜漫筆』¹⁶など、季語集や年中行事記にずいきや野菜を用いて作った神輿を昇き回る「ずいき祭り」が行われていた様子が記述されている。

西之京の瑞饋神輿が出来て後は、北野天満宮近辺の上七軒や大将軍と言った地域でも同様のものを作成するに至り、互いに新奇を競うようになった。また飾剣銚なども精巧に作ったという。先ほど提示した『宮仕記録』において、祭りが行われていた範囲が「西京上大将軍下大将軍」で記述されていたとおり、西之京の周辺にある町々でも祭りが行われており、「作物之銚」などが祭りに出ていたという記述と一致しており、由来の記述が当時の瑞饋祭の様子を示していると考えて差し支えないだろう。

(四) 祭りの中止と再興

瑞饋祭は明治はじめまで続けられており、明治七年（一八七四）には、西之京・大將軍・紙屋川・西今小路町、各町の瑞饋神輿に初めて神座を設けて北野天満宮のご分霊を遷して巡幸をしたと、『歳事史』『略記』には記されている。瑞饋神輿へのご分霊の奉斎について、「瑞饋祭の趣旨を誤解して」とあり、明治七年に初めて神座を設けたとあるから、本来的には神座は設けて居なかったことが窺える。翌、明治八年（一八七五）に祭りが中止されたと由緒には記されたとあり、これは明治八年に官の許可を得て北野祭が私祭として再興したことに依るとしている。

瑞饋祭は明治八年を境に行われなくなったが、明治二十三年（一八九〇）に西之京の有志らが瑞饋神輿制作の技術が煙滅することを惜しみ、同志を集め瑞饋神輿の再興を企図した。再興に際しては北野天満宮に瑞饋神輿再興の趣旨を伝えたくて、十月に行われる神幸祭で御輿岡の御旅所から還御する神幸箇簿の後列に加わる形で再興が決まったとある。また、『北野誌』によれば翌明治二十四年（一八九一）には大將軍の瑞饋神輿も再興されたとある。このように、中止と再興を経た瑞饋祭は、従来の西京神人と西之京の農家の連合で行われる独自の祭りから、西之京の有志

らが瑞饋神輿を奉造し、北野天満宮の祭りに加わる形式へと変化していたことが窺える。

以上、瑞饋祭の歴史の変遷と祭りの様相について確認をした。瑞饋神輿が成立して以降の祭り変遷と様相については、『北野天満宮史料』をはじめとする文献より確認することが出来る。逆に瑞饋神輿が成立する以前の歴史については、由緒である『北野誌』などの記述以上については不明な点が多いと言える。

(五) 祀り手の変遷

次に瑞饋祭を支えてきた祀り手について概要を示す。

現在、瑞饋神輿を作成・巡幸しているのは西之京瑞饋神輿保存会という組織である。組織は西之京に居住する人々で構成され、職種は公務員や自営業など様々である、うち数軒は農家を営んでおり、瑞饋神輿に用いられる蔬菜類の栽培を行っている。保存会の活動は上京区北町―天神通―にある会所にて行われ、瑞饋神輿に取り付けられる角環珞などの部品類の作成や保存会の会議などが行われる。また瑞饋神輿で使用する長柄といった道具類を仕舞っておくための蔵が同じ敷地内にある。なお、瑞饋神輿の作成―飾り部品や長柄の取り付け―は御旅所にある御輿庫にて行われ、こちらには神輿型や長柄を取り付けの際に使用される道具

類が収められている。

さて、瑞饋祭の変遷の中で述べたように、瑞饋祭の祖形となる祭りを行っていたのは、西京神人と呼ばれる、北野社に奉仕していた人々であったとされている。彼らは、麴座神人^{こうじざじん}として麴役の免除特権を持つ代わりに、麴の独占販売を行いその利益を北野社に納めていた。⁽¹⁶⁾ また北野祭における「馬上七騎」「保々鉾」を担当、北野祭の「麴御供」「銚御供」をはじめ年中祭典で献じられる「御供」「饌供」「御鉢御供」と言った神饌類の備進、公事の柴や木などの納入といった多岐に渡る神役負担を彼らが担っていた。⁽¹⁷⁾ 『北野天満宮史料』を確認する限り、西京神人が近世以前に自ら祭りを行っていた、という記事は確認出来ない。近世に入って、西京神人らが御輿岡の御旅所で何らかの祭りを行っていたことが確認出来る。⁽¹⁸⁾ また、『北野誌』などの由緒では、瑞饋神輿が成立した際には西京神人らと地元⁽¹⁹⁾の農家が連携して瑞饋神輿を作成し祭りを行ったとあり、祭りを支える祀り手達が西之京の地域の人々まで参加する広がりを見せたようである。

明治の中止と再興を経た後、瑞饋祭の祀り手は西之京の有志という形になった。⁽²⁰⁾ これが、現在の西之

表2 明治以降における瑞饋祭の主な出来事

年代	出来事	組織名
明治8年(1875)	北野祭の再興に際して、瑞饋祭が中止される。	不明(西京神人及び西之京の農家)
明治23年(1890)	瑞饋神輿、北野天満宮の10月の祭りにおいて、神幸鹵簿の後列に加わる形で再興される。	不明(西之京の有志)
大正9年	北町の会所にある神輿蔵が建造される。	西之京神輿保存講・西之京青年団
大正14年(1925)	瑞饋神輿の神輿型が改造される。従来のものよりやや小さく改造される。	西之京神輿保存講・西之京青年団
大正15年(1926)	神輿車が使用される。	西之京神輿保存講・西之京青年団
昭和2年(1927)	現在の神輿車が作成される。	西之京神輿保存講・西之京青年団
昭和3年(1928)	北野天満宮万燈祭が行われる。文子祭で使用される獅子頭作成がされる。『瑞饋神輿略記』が西之京青年団によって発行、頒布される。	西之京青年団(西之京青年会)
昭和7年(1932)	文子天満宮の神輿が作成される。	西之京青年団(西之京青年会)
昭和8年(1933)	北町の西之京青年団会所の賃貸契約書が作成される。	西之京青年団(西之京青年会)
昭和23年(1948)	西之京青年会の規約が設けられる。	西之京青年団(西之京青年会)
昭和28年(1943)	長柄を新調(現在使用しているもの)	西之京青年団(西之京青年会)
昭和45年(1970)	西之京青年団から西之京瑞饋神輿保存会へと名称を変更。	西之京瑞饋神輿保存会
平成14年(2000)	神輿型の骨組みが改修される。	西之京瑞饋神輿保存会
平成22年(2008)	文子祭で使用する獅子頭を修復。	西之京瑞饋神輿保存会
平成26年(2014)	神輿車が改修される。	西之京瑞饋神輿保存会

京瑞饋祭保存会の原型である。大正時代には西之京神輿保存講という名称であったことが瑞饋神輿を載せる神輿車から分かる。

西之京神輿保存講

舊西之京村方

菅直

入江繁太郎

清水藤三郎

奥村観良

石野幸太郎

新實たね

川井銀之助

前田敏治

京都下立売六軒町

井上惣次郎

昭和初期には西ノ（之）京青年団と言う名称が窺え、祭礼当日配布されていた『略記』^②や神輿車の車体後方にある小道具入れにその名前が見て取れる。現在の名称になったのは、昭和四十五年（一九七〇）である。

以上、瑞饋祭とその祀り手についての歴史的な変遷につ

いて確認を行った。

三、近現代における祭り・祀り手の様相と変化

（一） 祭りの再興と西之京青年団の結成

次に、明治二十三年（一八九〇）に、北野天満宮の十月の祭り、その渡御列の鹵簿として再興されて以降の祭りの様相と変化について確認を行っていく。ここでは、明治の再興から西之京神輿保存講・西之京青年団の活動期と、西之京瑞饋神輿保存会の活動期の二つに分けて、祭りと祀り手の変化について、主な出来事について時代順に追うことにする。

瑞饋神輿が再興された当初は西之京の有志―元神人などを含めた西之京の地域の人々―で祀り手が構成されていた。この当時、瑞饋神輿は四日の還御祭で巡幸を行っており、御旅所を出ると上の下立売通を東に向い御前通へ向い、千本上長者町、五番町、仁和寺街道、七本松、下ノ森、御前通今小路、七本松、元誓願寺、大宮、五辻、千本今出川、御前通りの南鳥居前を経て本社に還幸したと言う。この巡幸路は丁度、西之京十六町を巡る形になっており、大正十五年（一九二六）ころまでつづいたと言う。^③なお、再興された当時は、現在のような神輿車は無く、担いで神輿の巡

幸をしたという。

大正九年（一九二〇）、北町の青年会会所に神輿蔵が出来た。これは神輿蔵の梁に「大正九年五月吉辰 西之京青年会」と建造の年数が墨で記されていることから窺え、当時すでに会所が現在の場所にあったことが伺える。

大正十四年（一九二五）に瑞饋神輿の神輿型が新調され、従来のものより小型になった。現在使用されている神輿車が登場するようになるのは、大正末からで、神輿車には、西之京神輿保存講と西之京青年団、二つの組織名が記載されている。神輿車後方には、西之京神輿保存講とあり、一方、神輿車後方の下段にある小道具入れの奥面には、西之京青年団という名称が書き込まれている。ここには、青年団の組織として幹事二名・会計一名・取締六名・世話方十六名の名前があり、昭和二年（一九二七）九月の記名であることが分かる。おそらく、神輿車を作成した後、何らかの理由で書き込まれたものと推察される。

西之京青年団の名称は昭和三年（一九二八）に発行された『略記』にも表れている。この年は北野天満宮の万燈祭が行われた時期であり、この万燈祭に合わせて頒布されたものと考えられる。昭和八年（一九三三）、青年団の会所の賃貸契約が、会所の土地所有者で当時選仏寺住職だった梶浦逸外と結ばれる。それ以前の賃貸契約書は現在の所見つ

かっていないため、どのような条件で使用していたかは不明だが、新たな賃貸契約書には青年団が善導に反すると判断される行為を行った場合、契約を解除する旨が記載されている。青年団という名前からも分かるように、単純に瑞饋神輿を作成・巡幸するという組織ではなく、地域の青年らの集まりという側面も持ち合わせていたことが考えられる。賃貸契約が結ばれる前年には北町にある文子天満宮の神輿が奉造されているが、これも青年団が巡幸や神輿の保管を行っており、この伝統は現在も続いている。

昭和二十三年（一九四八）に西之京青年会の規約が設けられる。この規約の冒頭には青年会の「由来」として「西之京青年会は西之京十六ヶ町より組織されたる西之京若中なる団体を改称せるものにして」とあり、青年会の前身が西之京若中という組織が母体となっていたことが分かる。このことから、先の西之京神輿保存講と西之京青年団は別々の組織として、瑞饋祭に関わっていたことが考えられる。昭和二十八年（一九五三）には瑞饋神輿の担ぎ棒である長柄を新調している。現在もこの長柄は使用されているが、昔使用していた長柄も保存されており、実物を見ると反りが強くなっていることから、新調したものと推察される。昭和四十二年（一九六七）には七月にNHK主催の『ふるさとの歌まつり』に瑞饋神輿が参加しているが、七月と

いう時期で本来使っている野菜も使用できないため、代用の野菜類を使用して神輿を急遽作ったという。なおこの時、神輿車は使用せずステージ上で会員三十数名で神輿を担いだという。

(二) 青年会から保存会への移行

昭和四十五年(一九七〇)に西之京青年会から西之京瑞饋神輿保存会へと名称が変更される。この頃の会員の数は三十名前後で構成されており^②現在の会員数とあまり変化が無いことが分かる。この頃は神輿車を用いての巡幸と共に、御神酒料を頂いた場所などでは、神輿車から神輿を降ろして担いで回っていた。詳細な時期は不明だが、神輿車を曳くの牛を使用していたこともあった。しかし牛がすぐにへたばってしまうため、結局地域の若い人たちに曳き手をお願いする形へと落ち着いたそうである。

この頃の巡幸路は現在のものと少し異なっており、昭和五十六年当時の巡幸路を見ると、御前通りを出ると北進してから天神通へ入る道をたどっている。現在は御前通りを南進し、丸太町通りへ入って方向転換し、北へ上るルートをとっている。ただし、巡幸路は異なるが、巡幸する地域の範囲はあまり変わってはいない。おそらく交通規制の問題などで、変更があったものと考えられる。現在でも、細

かな巡幸路の変更はあり、状況によっては現場合わせで巡幸路に変更が加わる場合も稀にある。

瑞饋神輿の意匠も時代によって少し変わる場合がある。瑞饋神輿の屋根や真紅に括りつけてある藁細工の梅鉢を例にとると、会員の方が所有している明治や昭和初期の写真などではあまり梅鉢がついていないが、戦後以降の写真では、梅鉢がたくさん真紅に取り付けられている。会員の方の話では、会員の趣向や趣味も飾り付け方を左右する、との言である。現在では、真紅の梅鉢は少し減っており、千日紅の赤と白で描かれた「天満宮」の文字がはつきり見えるようになっていく。

平成十四年(二〇〇二)には万燈祭に合わせて神輿型の骨組みに改修が加えられる。また平成二十六年(二〇一四)には神輿車の改修が行われ、本体の檜には防腐効果のある柿渋が塗布され、梅鉢の金物などは綺麗に磨きあげられた。また、神輿を乗せるため台にはバネと厚めのゴムが敷かれ、瑞饋神輿を揺らすのが楽になるような工夫も加わるようになった。瑞饋神輿を担いで長柄にあるナリカン揺らした頃に比べて、神輿車に乗せてナリカンを鳴らすには、長柄の前後にいる人の息をあわせてシーソーのように細かく揺らさなければならぬ。バネやゴムを敷いたのはナリカン

を鳴らしやすくする工夫と、鳴らしやすくすることで神輿

と神輿車自体の傷みを防ぐ意味がある。

このように工夫が施されるようになった最近ではあるが、祭りを古い形に戻しているところや、祭りをよく知ってもらう工夫を試みている。例えば、神輿を曳く時の掛け声を「わっしょい」から「ほいとほいっ」と昔ながらの掛け声に戻すなどしている。瑞饋神輿が巡幸しない一日から三日には、近隣の幼稚園や小学校の子どもたち向けに瑞饋祭と瑞饋神輿の話をしたり、これまで配布していた『瑞饋神輿略記』を見直し、わかりやすい配布物を作るなど、祭りが維持できるように尚且つ祭りの雰囲気壊さないような工夫が行われている。

(三) 変化の様相——祀り手の不足と工夫——

以上、明治期の再興から現代までの祭りと祀り手の変化について、概要を確認した。祭りの変化としては、神輿を担ぐ形式から、神輿車に乗せ運搬・要所で担いでナリカンを鳴らす形式、そして神輿車に載せたままの運行とナリカンを鳴らす形式へと変更されていったことが分かる。また、梅鉢の例のように、時代によっては飾り付け方に変化が見られたが、その点は多くの会員が神輿の作成に携わっている故の個性、という範疇かと思われる。

次に祀り手の変化だが、当初の西之京の有志という形か

ら、西之京神輿保存講と西之京青年団（青年会）へと組織されていったことが伺える。この二つの組織がどのような性格をもっていたのかは不明であるが、青年団についてはその前身が「西之京若中」であったことから祭りで見える若者連と地域の青年会を兼ねたような組織と考えられる。また青年団の組織としての性格を鑑みると、青年団のOB組織が西之京神輿保存講という組織だったと推察される。これらの組織の内、西之京青年団を母体として現在の保存会へと改称され、瑞饋祭及び文子天満宮の文子祭を支える組織となっていたことが確認出来る。翻って現在の保存会の活動や祭りでの工夫を見ると、瑞饋祭をより良くしようと工夫し、広く知ってもらうための活動が増えていると考えて差し支え無いだろう。それは、祀り手としての危機感——祀り手の不足・祭り自体の認知不足——があつての活動や工夫であると考えられる。

では、何故このように祀り手が不足しているのだろうか。今でも地元の人が瑞饋神輿に手を合わせ、沿道には珍しい野菜の神輿を目当てに写真を撮影したり、取材をしたりしている人もいる。何故、祭りに参加する人が少ないのか。その要因について、西之京という地域がどのように変化してきたのかに焦点をあてて分析を試みたい。

分析とまとめ

すでに冒頭で述べたように、現在の西之京という地域は、都市化の波に晒されつつあると言える。保存会の会所がある北町などの周辺では、新築のマンションや戸建て住宅が、古い街並みの中に見え始めており、西大路通に面していることから自動車での行き来もしやすく、徒歩でJR円町駅や市営バスにアクセス出来るため、京都駅への交通も非常に便利である。旧西ノ京村にあたる、中京区西ノ京中保町や御旅所のある西ノ京御輿岡町も、新築のマンションがここ数年増え始めている。

保存会の会員へのアンケート調査を行った中で、「瑞穂神輿が巡幸する地域（特に西之京周辺）」についてお尋ねします。昔と比べてココが変わったな、と思う点があればご回答ください」という質問項目を設けた結果、以下の様な回答が得られたので一部抜粋したのが表3である。

表を見て分かるように、マンションなどが増え、従来あった商店がシャッターを下ろしていることが見て取れる。また、マンションが増えていることに付随して、近所付き合いに苦労している、御神酒料をお願いしても断られてしまふ、お祭りのことをご存じない、と回答している方が多いことが分かる。回答では提灯の数が減ったというものの

見られるが、これはお祭りに協賛してくれる商店や個人の名前があった提灯を御旅所に設営しており、その数が減っている、ということである。先の商店が減った、商店街がシャッター街化しているという現象と、提灯の減少は直接的につながっていると考えられる。商店街のシャッター街化は、近隣にスーパーマーケットが出来たり、移動に車を使う頻度が高くなり、遠方に買い物に行く人が増えていることが、要因の一つであろうし、商店の経営者の高齢化と跡継ぎの問題も、要因として考えられる。

現在の西之京という地域がどのような状況に置かれているかを改めて整理すると、以下の様な点として纏められる。

一、マンションの増加と近所付き合いが減少し、祭りを知らないし関わらない住民が増えた。

二、新規住民が増えたにもかかわらず、商店を利用しないため、商店自体が減少している傾向にある。

以上の二点を勘案すると、従来様々な形で祭りに関わってきた人が減少し、しかし新規の住民は祭りを知らないし、知っていても関わらないために、祭りに興味関心を持ち、祭りに参加しようとする人が総じて減少しつつ現状にあると言える。

以上述べたような現状の認識は、保存会の会員の人々の共通認識としてあるため、保存会全体の活動として、祭り

表3 アンケート調査結果集計表—街並みの変化について—

生年	職業	西之京の街並みの変化
昭和43年 1月	自営業	大きな土地（古い長屋、ガレージなど）や一軒家がなくなった後に小さな3階建ての家が何件も建って、若い世代が入ってきました。マンションも増えました。3階建ての家が増えているので、圧迫感があり、通りに京都を囲む山々が見えなくなってきました。 人付き合いは希薄になってきていると思います。特に高齢者世帯と若い世帯（前から住んでいる人と新しく入ってきた人）の間に交流や立ち話などがあまりないような気がします。 交流の大きな機会である地藏盆もおやつなどを受け取ったらすぐに家に帰ってしまって、会所にいるのは役員が仕方なく番をしている状態で盛り上がり、昨年から1日だけとなってしまいました。普段から子供が集まって外で遊ぶ姿を見ることもなくなりました。
昭和27年 3月20日	自営業	巡行する地域では最近お商売をされているお店が少なくなったように思われます。
昭和16年 6月2日	無職	入会した当時（60才頃）は先輩諸兄が大勢おられたが、15年近く経過した現在、ふと気が付くと会員の中でも自分が高齢のうちに数えると我ながらびっくりしている現状です。新規会員が増えない限り、地域の伝統あるまつりも人手不足の状況を心配しています。
昭和3年 8月17日	農業	祭りの提灯が減ったように思う。
昭和32年	一級建築士	①瑞饋神輿保存会は、発足当初会員も農家の人々を中心に構成されておりましたが、現在は農業専従世帯は3軒のみで、他は公務員やサラリーマン、自営業と様々です。しかし、職業は違ってても代々この地域に居を構える子孫の集まりで、農家の方々とも昔ながらの付き合いをしてきた者同志、和気あいあいに交流しております。 ②西之京界限も町内に必ず1つや2つマンションがあり、近所づきあいも希薄になってきております。御神酒料の寄付のお願いをしても断られることもあったり、運営に苦労しております。
昭和18年 11月1日	自営業	神輿の巡行する地域には、商店街が多かったのですが、最近では小売店が少なくなり人影も減りました。高齢者が比較的多く見学しておられます。
昭和36年	公務員	新しい家が増えた。他所からの転入者が増え、瑞饋神輿、子供神輿を知らない人が増えた
昭和28年	農業	・田畑や個人商店が減りました ・百姓の数、職人（いろんな）も減りました ・西陣織の織機の音もうるさかったですが、しなくなりました。
昭和42年	看板製作業	御旅所商店街がシャッター通り化している。下立売（妙心寺道）の提灯建てでも、地区の中保町が建てておられたが高齢化に伴い、援助を必要とされている。2年連続で、北野天満宮、材源、保存会会員（梢下・竹尾）が手伝いを実施している。



図2 明治二十二年 京都・中部実測図

の広報などに努め、なるべく地域の人々に知ってもらおうとしているのが、現在の状況である。

こういった問題や状況は、西之京が町家や田畑が多かった明治・大正の時代にもあったと考えられる。

図2を見ても分かるように、西大路通を挟んで東側は町家や田畑が点在する景観であり、西側の西之京村の多くは田畑が占めている景観であった。このような景観だった西之京が、

現在のような景観へと変化していった理由について、農地改革などがあって、農地を手離す人、農家を継がずにサラリーマンになる人などが多くなったためと、会員の聞き取りから見えてきた。また、商家や職人の家にも、家業を継がずサラリーマンや公務員になる人が多かったと言える。それぞれ個人の事情はあるにしても、農家や職人などをしてにくい、そういう時代状況にあったことが伺える。

そういった職業上の理由から祭りへ参加できなくなる人も増えたと、調査では話しがあった。そう言った事情もあって、神輿車のように運搬の弁をはかるなどして祭りを継続させていく努力がなされたと考えられる。

以上の分析から、従来の瑞饋祭を支えてきた農家を生業として行ってきた祀り手たちを取り巻く西之京という環境が変化するため、神輿車の導入や担ぎ方や運搬の方法の変更などが行われてきたと言える。

ただし、具体的にどのように地域環境が変化したのか、という点については詳細な分析ができていないため、今後は公文書や統計書を使用することでより正確に西之京の変化と祀り手の変化との関係性について論じる予定である。

註

(1) 瑞饋神輿については岩井宏實・日和祐樹『神饌』（同朋

舎出版、昭和五十六年）に、「瑞饋神輿は本来神饌品の
変形であり、神輿と称してはいるが、神霊をこれに移す
ことなく、神幸祭にも列外供奉として後部に巡幸する」
と説明しているほか、櫻井敏雄「神輿の構造と形態」
〔悠久〕第七十四号、特集「神饌」、鶴岡八幡宮、平成
十年）では瑞饋神輿について「特殊な形態としては、北
野天満宮や御上神社の瑞饋（ずいき）神輿があるが、神
輿と称しても神霊を移して奉ることはなく、屋根は茅葺
で葺き収獲した作物・草花で色とりどりに飾り付け神輿
状とし神饌と称するものである」と紹介している。ただ
し、実際には瑞饋神輿の中には厨子が納められ御霊を奉
斎していることから、神饌であり神輿という認識が正し
いと考えられる。なお、瑞饋祭及び瑞饋神輿の歴史につ
いては、瀬川弥太郎「瑞饋神輿」（私家版、昭和五十七
年）、西村豊・三枝暁子「京都 天神をまつる人々 ず
いきみこしと西之京」（岩波書店、平成二十六年）に詳
しい。

(2) 吉野亨『特殊神饌についての研究』武蔵野書院、平成二
十七年。

(3) 西之京瑞饋神輿保存会で用いられている「西之京」とは
西之京十三町（現在の北町・川瀬町・堀川町・中保町・
行衛町・突抜町・大宮町・西上之町・仲之町・天満屋
町・西東町・下之町・南上合町）のことを指しており、
現在の行政区分である「西ノ京」とは異なる。

(4) 北野神社社務所編『北野誌』首巻、國學院大學出版部、
明治四十二年、一一一―一一三頁。

(5) 江馬務『日本歳事史』京都の部 内外出版株式会社、大

正十一年。

(6) 西ノ京青年団「瑞饋神輿略記」昭和三年。

(7) 「北野天満宮史料」は「古記録」「目代日記」「社家日記」
「遷宮記録」等、現在北野天満宮に所蔵されている史料
を翻刻、収録したものである。この内、「目代日記」（昭
和五十年、北野天満宮）は北野社を支配した曼殊院の事
務職である目代が記録したもので「宮仕記録」（統一
統五、平成八年―平成二十二年、北野天満宮）は祀官三
家と呼ばれる松梅院・徳勝院・妙蔵院の下で神殿の奉仕
等に従事した祀官である宮仕が記録したものである。

(8) 「三年一請会引付」（北野天満宮史料刊行会「古記録」昭
和五十五年、北野天満宮）一七〇頁。

(9) 史料纂集「北野社家日記」第七（平成十三年、統群書類
従完成会）四六頁。

(10) 伝土佐光吉「十二ヶ月風俗図」は現在山口蓬春記念館に
収蔵されている重要文化財である。なお図の確認には
『国宝・重要文化財大全』二（毎日新聞社、平成十一年）
に掲載されている図版を用いた。

(11) 北野天満宮史料刊行会「北野天満宮史料」宮仕記録、統
三、北野天満宮、平成十一年。

(12) 北野天満宮史料刊行会「宮仕記録」統四、北野天満宮、
平成十九年、四五五頁。正徳三年（一七一三）九月四日
の記事に「四日晴時々時雨、一、西京祭ねり物出ス由也、
大將軍村下横町鉾引山東ノ鳥井之辺まで来ル」と、西ノ
京から大將軍村で行われている祭りについての記載があ
る。

(13) 菅沼奇淵『俳諧新季寄』享和二年。九月の季語に「ずい

き祭り 北野ずいきにて神輿五柄をこしらへかきまはる也」とある。

(14) 速水春曉斎著 儀礼文化研究所編『大日本年中行事大全』

(桜楓社、昭和五十四年)。

九月の条に「九月四日 北野芋茎祭未刻 北野祭なり。生土地より青物にて神輿を作り、北野本社境内に昇入、西島井より出でて近辺を昇行。是を芋茎御輿といふ」とある。

(15) 三田村鳶魚編『未刊隨筆百種』第五卷(中央公論社、昭和五十二年)二一〇頁。「九月四日北野大將軍の祭礼には、

産子の町にて芋の茎其外色々の野菜物をもて、神輿をつくり出せり、此細工絶妙にして奇なり、故に世に北野のずいき祭りといへり」とある。

(16) 小野晃嗣「北野麴座に就きて」(『日本中世商業史の研究』

法政大学出版局、平成元年)。

小野は、麴販売による利益を北野社へ納めていた麴座の実態を指摘している。この中で西京神人の特権として「造酒正より一般酒屋ならびに麴売に対して課せられるべき酒麴役の免除」について指摘しおり、すなわち西京神人による麴販売の独占特権があったことを指摘している。加え、座としての居住制限が課せられていたことも指摘している。

(17) 網野善彦「西の京と北野社」(『日本中世都市の世界』筑

摩書房、平成八年) 網野は西ノ京とそこに生きた人々つまりは西京神人と北野社の関係について論じ、どのような変貌を遂げていったのか論じている。その中で西京が「節料木」を始め酒や素餅・串柿などを北野社へ納入し

ていたことについて指摘している。

(18) 北野天満宮史料刊行会『北野天満宮史料』宮仕記録、続

一(北野天満宮、平成八年)。

元禄二年(一六八九)五月条に「禁宮ヲ申五位装束上八人前こしらへ祭を渡シ可申候由、本社ニテ成不申候ハ、御旅所ニ而祭をわたし可申様ニ聞候」とあり、西京神人らが、本社である北野社において祭りが出来ない場合は、北野祭でかつて使用されていた御旅所を使つて祭りを行おうとしていたことが分かる。また、同史料の元禄二年(一六八九)五月十一日条には「近年御旅所を種々取持祭之時節などニハ神供ヲ上ケ神楽ヲ上ケ取はやし、神人共罷出にきハ、しき躰を仕由に候」(傍線筆者)、北野天満宮史料刊行会『北野天満宮史料』宮仕記録、続三(北野天満宮、平成十一年)宝永三年(一七〇六)九月三日条には「頃日風聞ニ西京ニ祭礼ヲ催ス旨也、少キ御輿ヲ拵等之事也、」風聞ニ御旅所へ神供ヲ備、又ハ御輿之沙汰ニ付宮遷被致等之事也」とあり、近世に入ってから西京神人らが、「御旅所」「西ノ京」を中心に祭りを行っていたことが確認出来る。

(19) 瀬川弥太郎『瑞饋神輿』(私家版、昭和五十七年)によ

れば、当時祭りの再興に尽力した人々として「清水亀吉(西東町) 菅 直、石羽善之助(以上突抜町)、入江房吉(入江常吉、西村勝之助(以上行衛町)、浅田松之助(下之町)、瀬川勘兵衛(堀川町)、川井菊太郎(中保町)等ではないかと言ひ伝えられている」とあり、この本の著者である瀬川弥太郎(堀川町在住)が子供の時分に父(定次郎)が祭りの世話役として山高帽に羽織袴を身に

つけて神輿を先導していたとあり、家蔵の天満宮の御神符（明治八年）には「瀬川勘兵衛」の名があることから、祭りの再興に尽力した人物の子孫であることが分かる。

(20) 西ノ京青年団『瑞饋神輿略記』昭和三年。

(21) 瀬川弥太郎『瑞饋神輿』私家版、昭和五十七年、二五頁。

(22) 瀬川弥太郎『瑞饋神輿』私家版、昭和五十七年、二五頁。

本稿は公益財団法人日本科学協会笹川科学研究助成事業「北野天満宮瑞饋祭を支える人々のエスノグラフィ―近現代における地域と祭礼の変化を焦点に―」（吉野亨）の成果を基に作成しました。また、瑞饋祭の調査に際してご協力を賜りました西之京瑞饋神輿保存会の佐伯昌和会長をはじめ会員の皆様には多大なるご協力を賜りました。文末ではございますが、ご援助いただきましたことに感謝を申し上げますとともに、今後も研究の深化に努めて参る所存です。

（國學院大學大学院特別研究員）